



四条通りの南座の前を行く神輿。よく見ると鳳凰などの飾りが無い。



唐子をモチーフにした諫山宝樹さんの提灯。諫山さんは『光る君へ』の衣装デザインでも活躍。



右頁は南座の前にずらりと並ぶ提灯。上は八坂神社前で待つ提灯行列。



有名な金華山の鵜飼ではなく、少し上流にある小瀬鵜飼。見物客の船に吊るされた岐阜提灯は蠟燭の灯りだ。



安藤忠雄設計の兵庫県立美術館はヤノベケンジをはじめ多くの立体作品が（館外で）鑑賞できる。



暮らす旅 京都

猛暑の神輿洗と提灯行列

文・写真／松岡伸吾（暮らす旅舎）

40度近い熱暑の祇園祭。雨の中の前祭と猛暑の後祭の山鉾巡行が終わり、7月28日の神輿洗に参加した。

今回はさらにお茶の稽古と、兵庫県立美術館の藤田嗣治×国吉康雄展も目的だった。地下鉄の京都市役所前駅に着けば、地下街広場では大阪プロレスのタッグマッチの真っ最中。タイガースマスクやビリーケン・キッド、タコヤキダーなどのマスクマンがずらりと暑い中、熱いバトルが繰り広げられていた。

稽古は風炉でなく氷入りの水指を使う冷抹茶の点前。その昔、夏の茶会は早朝とかにやったようだ。翌朝、岩屋駅から安藤忠雄の美術館まで炎天下を歩いたが、徒歩10分は厳しかった。国吉の女の眼差しはいいが、ミュージアムロードと呼ぶなら、街路樹くらい整備して欲しい。安藤の青リリングは中国の観光客に大人気だった。

さて神輿洗は以前も取り上げたが、24日還幸祭の渡御を終えた神輿の飾りをすべてとり、鴨川の神水で清める神事だ。式を取り仕切る宮本組、神輿を担ぐ四若組が八坂神社から四条大橋まで、燃え盛る松明で道を清めて二度往復する。私たち提灯部隊は四条通りで行列を見守る。

神輿洗が終わると神事の掉尾を飾り、奉祝行事として私たち「お見送り提灯」が行進する。祇園界隈の店などが提供する提灯を掲げ、笛太鼓の囃子方や舞妓さんと一緒に祇園街を練り歩く。江戸時代には百を超える数の提灯があったそうだが、今年は60基ほど。八年前有志の運動で再興した時はたった7基だった。コロナ禍の中止を乗り越えて復活した。

笛太鼓の緩やかな調べとともに鯖寿司店の鯖や、海老芋の料亭の芋、髪飾りの店の鼈甲、さらに鰻、人形、草履、機関車など様々な提灯が路地を行く。今回初参加の提灯も多かったが、中でも画家の諫山宝樹さんの唐子の提灯は可愛かった。

月が変わって旧盆が過ぎ、お茶の稽古の前に岐阜へ向かった。関から郡上八幡へ長良川を巡る旅では、小瀬の鵜飼や郡上踊りが楽しめた。今年は雪が多くて鮎の成長が遅く、小型の鮎は全て鵜の餌になったそうだが、こつちも白鳥の食堂で天然鮎を満喫した。